

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 池田 喬

本論文は、『存在と時間』に至る初期ハイデガー哲学の全体的かつ綿密な検討を通じて、その思索が、「表象する主観」として人間を捉える伝統的哲学に抗して、「行為者」としての人間の「志向性・生・存在」を現象学的に分析する営みであったことを論証し、かつその「存在論的な意義」を明らかにしようとしたものである。初期ハイデガーの「行為」概念に注目する先行研究はすでに存在するが、従来は「理論と実践」という伝統的な二元論的構図のもとに「実践」としての「行為」が強調される傾向が強かった。これに対して本論文は、理論と実践を包括する「ふるまい」としての「行為」に着目し、そこから解釈される初期ハイデガー哲学の存在論的な意義を際立たせた点で、独自性を有する。

第一章では、初期ハイデガーが「意味」をめぐる考察を通じて、志向性の本質をフッサール的な「表象作用」から状況の中での「ふるまい」、すなわち「状況内行為」へと独特な仕方で捉え直したことが際立たせられる。表象する主観はもはや「意味の源泉」ではありえず、むしろ世界がそれ自身で「有意味性の連関」を形成しており、そこから促されて状況の中で発揮される「自発性」が「気づかい」であると解釈される。

第二章では、ハイデガーの有意味性としての世界概念が「リアリティーの新たな概念化」というディルタイ的問題設定を受け継ぐものとして解釈される。世界は主観から「独立に」有意味に構造化されているが、主観と「無関係に」外部に実在するのではなく、むしろ現存在に行為を促すのであり、それゆえにこそ世界はリアリティーを有し、また現存在も世界の内に存在しうることが詳論される。

第三章では、日常的現存在の「頹落」に関するハイデガーの分析の中に、〈客観的に実在する事物的な外部世界〉という観念が生じてくるプロセスが読み取られる。好奇心に駆られて空談するなかで道具的存在者のリアリティーが背景に退き、「何のために」という根拠が問われることなく、「タイプや性質」に関して事物的存在者に言及する傾向が必然的に生じる、とする論者の解釈は、斬新かつ独自のものである。

第四章では、現存在の「本来性」が「自らの行為の根拠を問う」あり方として解釈される。アリストテレスのプロネーシスに関するハイデガーの解釈をも参照しつつ、頹落した世人から本来的自己への実存的変様が、〈自らの行為の根拠を問うなかで「何のために」という道具性において存在者が再発見される〉という意味で「存在論的」であることが明らかにされ、この点に「本来性」概念の「存在論的な意義」が見定められる。同時に、世界に被投された現存在の、根拠を問い続けざるを得ない「非力さ」が際立たせられる。

以上のように本論文は、初期ハイデガー哲学を行為論として読み解き、その存在論的意義を明らかにした労作である。論者のいう「本来性」と「不安」や「死」をめぐる問題群との関係や、被投性と受動性との関係など、確かに本論文には議論が十分尽くされていない点も認められはする。しかし英語圏、ドイツ語圏の最新研究文献を参照しつつ、行為論、プラグマティズム、実在論の問題、アリストテレス解釈など、現代のハイデガー研究の中心的係争点に関して新たな哲学的論争を自ら引き受けようとした姿勢は高く評価される。よって、本論文は博士（文学）の学位を授与するに十分値すると判断される。